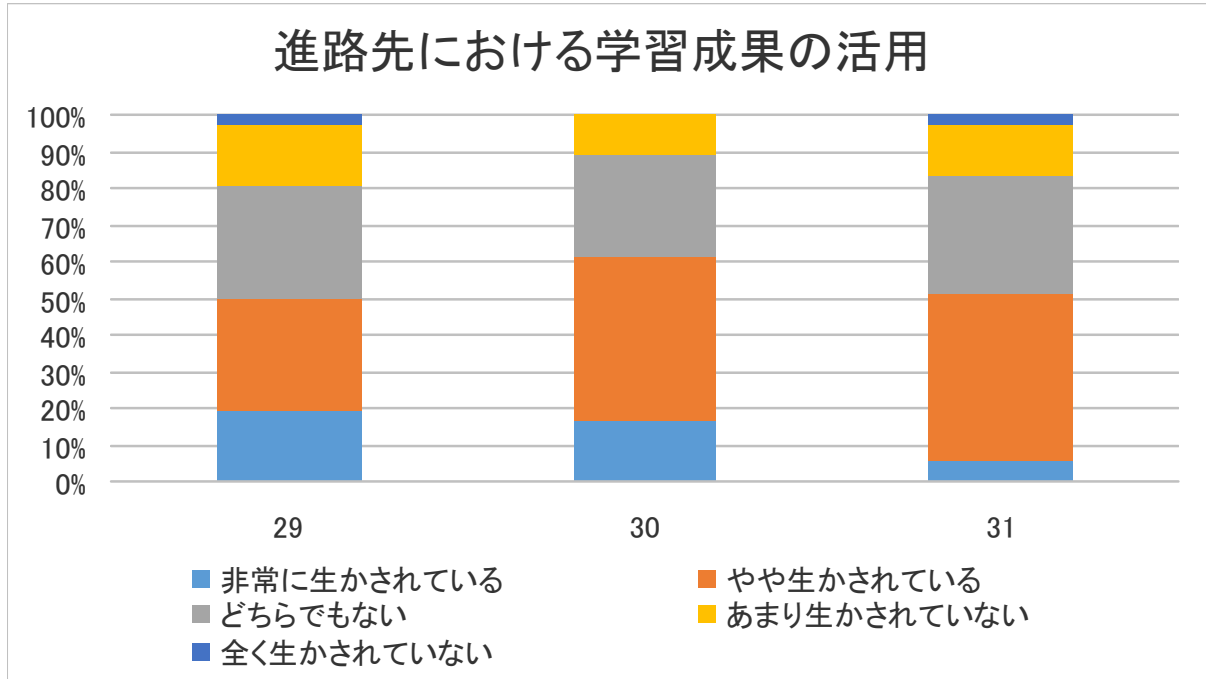
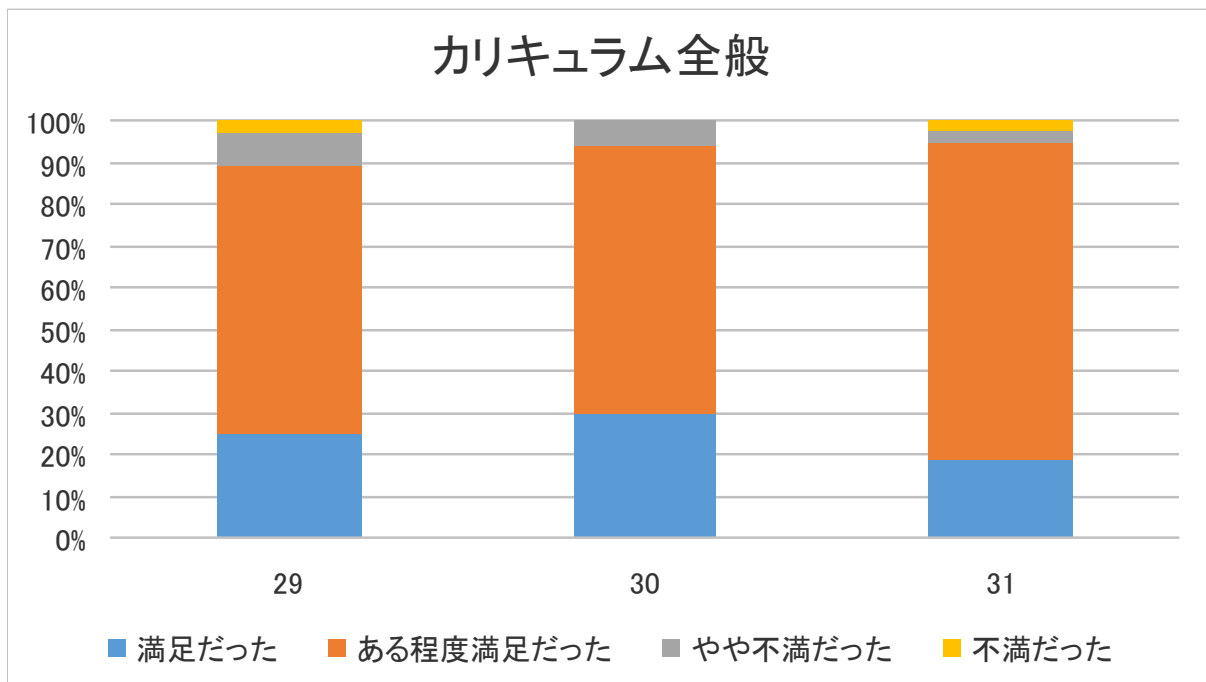


令和元年度卒業生調査結果概要

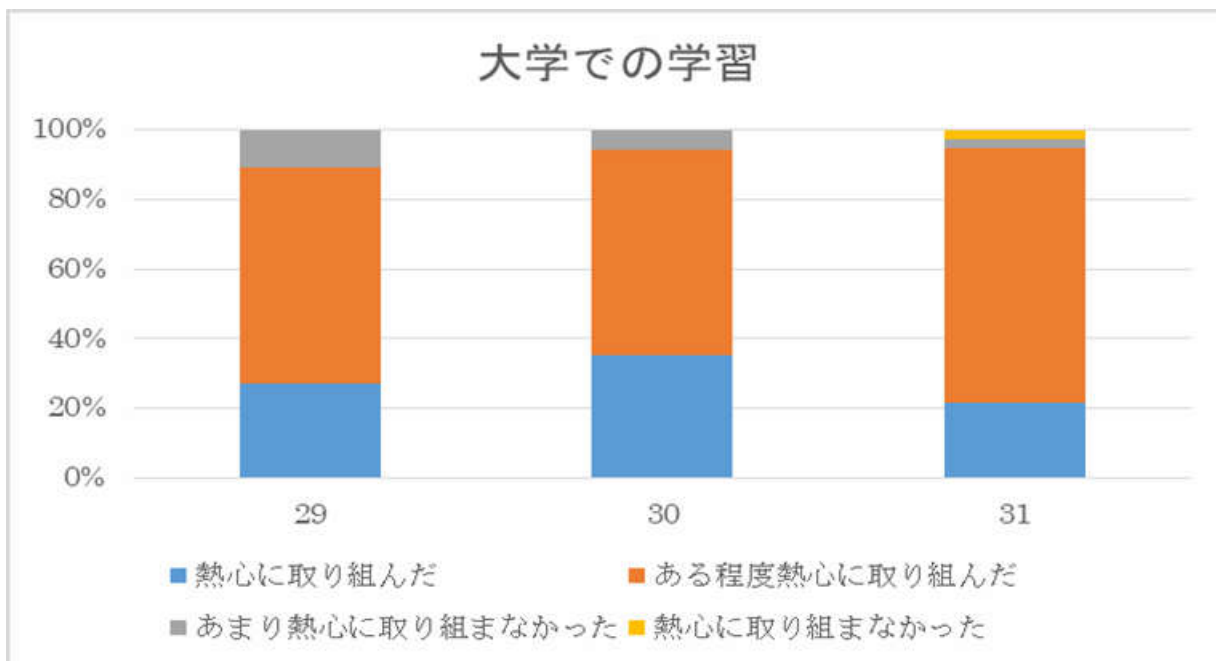
公益学部では、卒業後3年目を迎える卒業生を対象にアンケート調査を実施し、進路先において学修成果がどのように生かされているか等について、過年度との比較を行っている。令和元年度（令和元年8月実施）では、152名に調査票を送付し、37名から提出があった。以下、重要な項目について分析結果を記す。



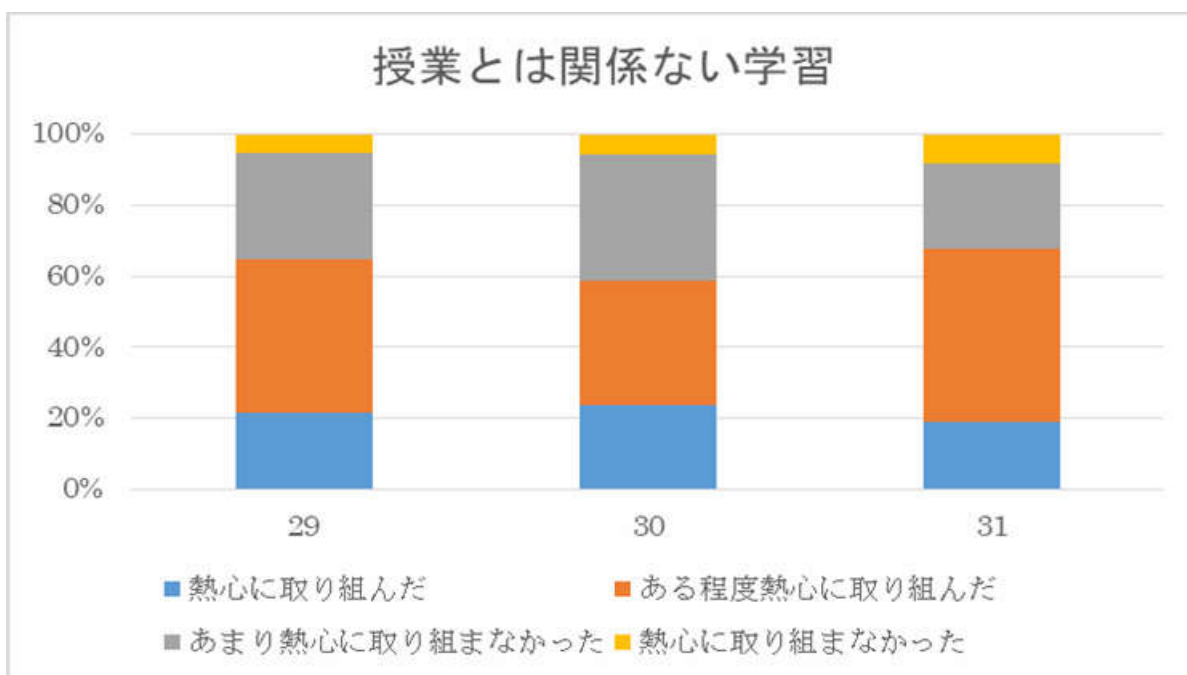
「非常に生かされている」「やや生かされている」の合計が継続して50%を超えている一方、「あまり生かされていない」「全く生かされていない」は20%未満であり、進路先の分野を問わず本学での学びが生かされていると評価できる。



「満足だった」「ある程度満足だった」の合計が、直近の2年間では90%を超えており、カリキュラム全般に対する満足度は極めて高いといえる。



大学時代の学習への取り組みについても、「熱心に取り組んだ」「ある程度熱心に取り組んだ」とする回答が、直近の2年間では90%を超えている。総じて本学の卒業生は学生時代に学びに真剣に向き合っており、進路先において学習成果が生かされているという回答が多いことも、このことと関係が深いと考えられる。



参考として、各種資格試験対策等、授業とは関係ない学習への取り組みを尋ねたところ、「熱心に取り組んだ」「ある程度熱心に取り組んだ」は7割に満たず、大学での学習への取り組みに比べると低い。これについては、大学が提供する教育サービスに対して受動的で、他の学びを積極的に求めない学生が増えているという、いわゆる「大学生の生徒化」を示すと解釈することも可能だが、本学卒業生の場合、進路先において学習成果が生かされているという回答が多いことを考えれば、むしろ大学での学びが有益であったために、それに力を入れたと理解する方が適切であろうと思われる。